

## 花と戦争

国立病院機構東長野病院

院長

小林信や

私は単身赴任して10年になりますが、守り続けていることが一つあります。それは、兄から単身赴任の心得として言われた「テーブルには花を欠かさな」です。病院の売店やスーパー、時には街の花屋で買い求めた花を眺めながら一人で食事を摂っています。一方、病院の花壇には学生やボランティアの皆さんが四季折々の花を咲かせてくれています。私も夏に百日草を咲かすのが恒例になっています。その百日草を朝の散歩に来られる方に、「少しですがいかがですか」と声をかけて分けてあげます。女性はもちろんですが、男性ももらってくれます。そして、わずかの花にも「ありがとう」が返ってきます。そんな時、ほのかな心のぬくもりを感じます。

岡倉天心の名著『茶の本』の中に“原始時代の人は、その恋人に花輪を捧げることによってはじめて獣性を脱した”という言葉があります。私が病院の花壇の前で感じた心のぬくもりを、原始の時代の人も感じていたに違いありません。でも、いったん戦争が始まったら花をめでたり、贈ったりする余裕はなくなるでしょう。いつの戦争でも、戦争への勇気を讃えるモノだけを有用としてとりあげてきました。花は戦争には無用のモノとして排除され、人心は再び獣性に戻ります。

国立病院機構では全国73カ所（186病棟）において、重症心身障害医療に携わっています。重症心身障害医療は「いのちを支える医療」です。もし、戦争が始まればこの医療はどうなるでしょうか。明らかに、重症心身障害児（者）は戦争に無用のモノであり、真っ先に排除されることは多くの歴史が語っています。

重症心身障害医療はキュア（治療）に比べ、ケアの比重が大きい医療の一つです。ケアの特徴は双方向性とお互いの成長にあります。提供側から受ける側への一方向性ではなく、提供する人は受ける人から多くのものを受け取り、教えられるといわれています。そして提供する人、受ける人の双方に人間的成長をもたらすといわれています。知的障害の父といわれた糸賀一雄氏は、重症心身障害児（者）医療の基本を「この子らに世の光を」ではなく、「この子らを世の光に」と述べています。そこには“生きる意味”を教えてくれる重症心身障害児（者）への深い洞察と、それを人々に伝える努力の必要性を含んでいます。

このような重症心身障害児（者）を守るためにも、戦争のない平和な世の中でなければならないと考えます。